
明日は晴れますように。

叶音*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日は晴れますように。

【Nコード】

N0670Y

【作者名】

叶音*

【あらすじ】

11月の雨が降る。

渡部 沙織は黒い傘を両手に。

大塚 馨は黄色い傘を片手に。

互いの気持ちに気が付かないまま、師走が近づこうとしていた。

横暴・乱暴・狂暴と、三拍子揃った従兄弟の突然の彼氏宣言や、現役小説家で超オタクな妹による彼女発言で、纏れに纏れた2人の関係。

女神は2人の関係を、元通りにしてくれるのか。

それとも…？

11月の雨傘

「雨、だな。」

師走が近づいてくる季節。

紅葉は散り、雪も降らない。

11月は、季節を感じる要素が限りなく少ないと私は思っている。

あくまで勝手な意見だが。

そんな季節に降る雨は、いつになく哀しさを増しているような気がしてならない。

「そうだ…ねえ。」

会話が途切れつつあるのは、お互いが会話にやる気を持っていないからという訳ではない。

雨音が激しすぎるのだ。

「どうせ降るなら、もっと静かに情緒深く降ってほしいよな。」

「こんな雨、情緒もへったくれも無いよ。」

「まったく、渡部はいつもキツイよな。」

「クール&ドライと言ってもらいたいね。大塚こそ、情緒とか言っちゃってさ。」

色気のない会話を交えながら、私はお気に入りの傘を開いた。ボスンっという音を立てて開いた傘は、黒い蝙蝠のようだ。

私は黒色が好きだ。

理由は特に無いけれど、とりあえず何かと黒色を選んでいる。

ふと、隣にいる大塚の傘を見てみる。

「傘、黄色っ！」

「うわあ、ビックリした…何をそんなに驚いてんだよ。」

「だってさ、こんなに黄色いんだよ？まるで蛍光ペンだよ！」

「蛍光ペンって…大袈裟すぎんだろ。俺は黄色が好きなんだよ。」

そう言って大塚が開いた傘は、私には眩しすぎる色をしていた。黄色。

私が1番嫌いな色だった。

ちよつとした変化

「その傘、閉じてよ。」

見慣れた帰り道も、灰色の空のせいでくすんで見えた。

私の黒い傘は、その空間にすっかり溶け込んでいる。

大塚の傘は別だ。

今にも光りだしそうな傘。

真つ黄色というのは、この傘の様な色を言うのだろうか。

「何で傘を閉じなきゃいけないんだよ。」

「眩しいから。」

「…そんな理由か。」

ふう、と溜息をついた君は苦笑いをしながら傘を閉じた。

と同時に、スツと私の左側に入ってくる。

「入るな。」

「知らんな。渡部が傘閉じろって言ったんだろ？」

「そりゃあ…まあ、そうだけど。」

「じゃあ良いよな。」

「そのかわり、傘は大塚が持つてよね。」

理不尽…という訳では無いのだが、いまいち納得がいかない。

渋々私は右側に寄り、傘を大塚に手渡す。

ハタから見れば仲の良いカップルに見えるだろう。

冗談じゃない。

でも、嫌だとは思わなかった。

噂の彼

「ただいま。」

「あら、沙織帰ってきたの？おかえり。」

「うん、帰ってきたの。」

靴を乱暴に脱ぎ、廊下にカバンを投げ捨て… ようとした。
が、怒られるのは目に見えているから、靴は揃えて脱いだ。

「そうそう、今日の7時頃から智明君達が来るから。」

「あ、うん。分かった。」

智明君とは、私と同年齢の従兄弟の事だ。

顔は良いのに、性格はボロツクソだ。

「7時… ねえ、今何時なの？」

「6時48分よ。」

「ああ… つてええ！？」

「智明君達は来るのが早いから、そろそろ来るんじゃないかしら？」

「ううわあああ！」

私は智明が苦手だ。

というよりも、智明の性格が苦手だ。

何でもズバズバ言い、ガスガス喋り、痛いところをキリキリと突いてくる。

「早く着替えないと…！」

私はダンダンダンと階段を駆け上がり、自分の部屋に閉じこもった。
制服を急いで脱ぎ、そこら辺にあったジャージを着た。

自分から制服にシワを付けたいとは思わないから、制服はハンガーにかけた。

着替えが終わわり、私はほっとしながら部屋を出ようとした。

「ふう… セーフだっ」

「アウト。」

身体中の血が逆流したような気がした。

そろ…っ　顔を上げてみると、そこには噂の張本人がいた。
智明だった。

「とととっ…とも…ともあ智明…」

「ああ、智明だ。」

「ちっ近寄るな…てえい、十字架！」

「俺は吸血鬼か！」

私が入差し指で作った十字架を、智明がペシッと叩いた。

「痛っ…うう、悪霊退散！」

「俺は地縛霊か！」

あるいみ地縛霊…とは言えなかった。
智明。

トラブルメーカーである。

曇りがちな私

「お邪魔しまーっす。」

「わっ、入るな！」

遠慮という文字が無い辞書を持つ智明が、ずかずかと私の部屋に入っていく。

必死に止めようとする私の努力が報われることは無かった。

智明は強引に部屋に入るなり、私のベッドにダイビングし、枕を投げつけてきた。

ボフンっという音を立てながら、枕は私の顔面に飛び込んできた。

「ふもおっ！？」

「おっしや、命中。」

「命中。……じゃ無いでしょ！何で年頃の女子のベッドにダイビングなんかするの！？」

「別に良いじゃん。」

「べべ…べっ、別についてどういう事！？140文字以内で答えて！」

「ツイッターかよ。」

負けを確信した私は、溜め息をつきながら智明の隣に座る。ベッドの低反発さがたまらない。

そこに、コンコンという軽い音が響いてきた。

「2人とも、ホットココア持ってきたから飲んでね。」

「ありがと、貰うね。」

にこにこしながらホットココアを持ってきた母に手を振り、智明の隣に座る。

カップから伝わる温もりが心地よい。

「ったく、お前な、もつと可愛く出来ねえの？」

「急に何を言い出すわけ？」

「いや、さおママから聞いたんだけどさ…。」

さおママとは私の母の事である。

沙織のママだからさおママ。

小学生並の発想力である。

私はホットココアを一口、二口と飲んだ。

「お前、好きな奴いるんだって？」

「ブフウー！」

淡い茶色の液体が、霧状になって口から勢いよく吹き出された。

「あっははは！お前凄えな！なんだ、忘年会の一発芸とかのホースの物真似か？」

「違…ゴフツ、ゲフツ…！」

ココアが喉の変な場所に引っ掛かり、ムズムズする。

ココアと悪戦苦闘する私を他所に、智明は話を続けた。

「最近さ、馨っていう男子と登下校してるって聞いてな、これはもしや恋…！？とか思ってたさ。」

「そんなんじゃ無いよ。ただの幼なじみだし。うゝ、ケフツ！」

「とゆー訳で、今からその馨君とやらを見に行く！」

「ふうん。……はあ！？？」

「行くったら行く！」

どうやら智明の辞書には、思いやりという言葉も載っていないようだった。

重なる厄

「うつわ、この鯛焼きつめえ！」

「ああ…そう。」

午後7時48分。

とある町の鯛焼き屋さんの横にあるベンチに、私と智明は座っていた。

智明はつぶあんを、私はカスタードの鯛焼きをそれぞれ頬張っていた。

「てゆーか、お前そんなカロリー高そうなの食べて平気なのか？」

「うるさい。黙って自分の鯛焼き食べてたら？」

「カスタード味美味そうだな。イタダキっ！」

そういつて、智明は私のカスタード味の鯛焼きを奪おうとした。

「うわあ！やめてよ、まだ半分も食べてないん…」

「…あれ？渡部？」

「ん？誰だこいつ？」

私はつくづく不幸だ。

どうしてこのタイミングで、大塚が来てしまうのだろう。

「あ…大塚…」

「おおつかあ？コイツの事か？」

「渡部…俺、どうしたら良いんだ？」

私は顔を背け、何も知らないフリをした。

無意味だが。

「おい大塚とやら！名を名乗れ！！」

「えっ！？ええ…えと、大塚馨…です。」

「大塚…馨…あーあー、分かった！さあママの言ってた男の子って、コイツの事なのか！」

「あの…俺、何を…」

「初めまして馨くん！俺は和田智明って言っんだ。一応、そこにい

る沙織のカレ：」

「そんな訳無いでしょ!？」

私は思わず立ち上がり、智明に人差し指を差した。

「あのねえ、これ以上大塚をからかうのはやめて!」

「誰もからかってなんかいねえよ。この馨クンに、事実をありのままに述べているだけだよ。」

「何が事実よ!！」

「渡部：もう一度聞くけど、どうしたら良いんだ？」

「あつ：ごめん。コイツは私の従兄弟で、横暴で乱暴で狂暴なの。」

「狂暴はお前だろ？」

「何でそうなるのよ!」

「それとも、凶暴の方が良いか？」

「……っああもう!！」

私は、手元にしっかりと握っていた鯛焼き（カスタード味）を智明の顔面に投げつけた。

すると、鯛焼き（カスタード味）は智明の左手にすっぽりとおさまった。

「よっしゃ、カスタード味ゲットだぜ!」

「あ!食べるな!」

「俺の立場、何なんだろ…。」

時計の針は、午後8時を指そうとしていた。

カスタード味の鯛焼き

その後、大塚とはぎこちなく別れた。

智明が持つカスタード味の鯛焼きは、もうすっかり冷えており、美味しさが半減しているようだった。

「やっぱり、怒ってる…よな？」

私の2歩前を歩きながら、智明がそう言った。

智明の2歩後ろを歩きながら、私がこう言った。

「そりゃあ、怒ってるよ。」

「すまなかった。」

「…ハア？」

「だから、すまなかったって。」

「ちゃんと謝って。」

「…はあ？さつきから謝ってんだろ。すまなかったって。」

「分かった、それが智明の謝り方なんだ。ふうん、へえ、はー、そう。」

「…っなんだよ！謝ってんだろ！？文句あんのかよ！」

「…もう良い。」

私はそう言い放った。

顔をあげるとそこには大きくて、怖くて、私みたいな暗闇がいた。

「ねえー！あなたはー、どう思うー！？」

返事が返ってくる訳も無く、私の問い掛けは響くばかりだった。

「今の、誰に聞いたんだよ。」

「誰だと思っ？」

「知らねえな。少なくとも、俺は知らねえ。」

私は右手を暗闇に投げ出した。

「それはねえ、“彼”だよ。」

「…“彼”え？」

「うん、“彼”。私が悩みや質問を投げかける。“彼”は無言のま

んまなの。」

「会話が成り立ってないな。」

「智明と？“彼”と？」

「どっちも。」

暗闇は私達を見下ろしている。

まるで嘲笑するかのように。

「馬っ鹿じゃねーのー!？」

智明は私の隣で叫んだ。

「今の言葉、誰に言ったの？」

「分かんねえかなあ？」

「私に？“彼”に？」

「どっちも。」

智明は、持っていたカスタード味の鯛焼きを投げた。

カスタード味の鯛焼きは暗闇に吸い込まれ、すぐに見えなくなった。

“彼”へのプレゼントだ。

そう言っただけで智明は歩きはじめた。

私は1歩後ろをついて歩くことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670y/>

明日は晴れますように。

2011年12月16日20時50分発行